

経済産業省資源エネルギー庁 令和7年度原子力発電施設広聴・広報等事業 [地域情報交流普及啓発]において制作されたものです。



## 東日本大震災から15年—— 復興のトップランナー女川町の今

2011年3月11日に発生した東日本大震災。被災市町村の中でも被災率が高かったのが、最大14.8mの高さの津波が襲った宮城県女川町だ。町の住宅の約9割にあたる約3,900棟が被害を受けた。それでも町ぐるみで復興に取り組み、「復興のトップランナー」と言われる。震災から15年、町を訪ねた。

## 還暦以上は口を出さない 若手奮起の町づくり

女川駅を出るとすぐ目の前に海へと続く遊歩道が見えた。道沿いには様々な商店が建ち並ぶ。2015年にオープンした「シーパルピア女川」だ。地域の商業活性化の中心的な役割を担っており、食から雑貨まで幅広いお店が軒を連ねる。女川のお土産物を楽しめるお店が目をはく。南側に進むと、女川町の名産品や地元の魚介類、スイーツを楽しめる飲食店が入る「地元市場ハマテラス」が見えてきた。海鮮に後ろ髪をひかれながら、向かいにある女川町まちなか交流館を訪ねた。

「町に関わる人がピースになり、女川町の復興が進んできた。人の力が女川町をつくってきた」と女川町商工会の磯部哲也さんは切り出した。



女川町まちなか交流館では復興の歩みを展示



女川町商工会 磯部哲也

東日本大震災で町の9割近くが被災した女川町。震災1か月後には町内のあらゆるセクターの代表者が集まり女川復興連絡協議会が立ち上がった。そこで当時の商工会長が口にしたのが「還暦以上は口を出さない」だ。「復興は20年後30年後の町の姿を描くもの。20年後の中心となる若い世代がやりなさいというメッセージだった。今までは60代以上の先輩方を中心に町づくりを考えてきたが、40代を中心としたメンバーに引き継がれた。新しく町づくりに携わる人も増え、復興が進んでいった」と磯部さん。

復興にあたりコンパクトシティを推進してきた女川町。「ここに来るまでに通ってきた遊歩道に飲食店が集まっている。町の人々は飲みに行くとなればこの通りのどこかのお店。1人で行っても誰かに会うんですよ」と





磯部さんは笑い、飲食店でアンオフィシャルなコミュニケーションから新たな企画が生まれることもあるという。「偶発的に生まれたアイデアが町を動かしているんです」

女川町は原子力発電所の立地地域でもある。震災時には発電所の体育館が避難所として開放され、約300人が3か月間避難生活を送った。

女川原子力発電所は24年10月に再稼働、同年12月に営業運転を開始したが、地域の方は発電所をどう見ているのだろうか。

「原子力発電所も町の経済活動における大事な1ピースを担っている。女川町には発電所の社宅があり、祭りやイベントなど地域活動を一緒にやってきた。飲食店で電力会社の人に会うことも多いですしね。東北電力の誰々さんではなく、一緒にイベントをやっている人の勤務先が東北電力、という認識でお付き合いしている人の方が多いのでは」。磯部さんの話を聞くと、地域の人と電力会社の一体感を感じる。

磯部さんに女川町の魅力を聞いた。「おいしい海鮮とかアイテムはいろいろあるが、一番の魅力は人。町で出会った人に魅力を感じ、この人に会いに女川町に遊びに来たという話を聞く。僕自身、家族は仙台市内に住んでいて単身赴任。復興に向け頑張る地域の人たちに惹かれて女川町にいる1人」

魅力的な人を中心に復興も進み、順風満帆にも見えるが、磯部さんは最後に課題を口にした。「15年経ち、次の20年、30年と女川町が生き残っていくためにこのままでいいのだろうか。基幹産業である漁業・

水産加工の底上げ、女川町ブランドをどう作り上げていくかを考えていけないといけない。15年前先輩方から引き継がれた当時の若手はそろそろ還暦が近づいている。今の若手に引き継いでいけないといけない」

## 女川町の魚を全国へ 海鮮で女川町を盛り上げる鮮冷

磯部さんは厳しい言葉を口にしたが、「皆それぞれの立場で女川町を盛り上げようと頑張っているんですよ」と表情をやわらげた。水産加工業を盛り上げようと頑張っていると、株式会社鮮冷の新妻宏太さんを紹介してくれた。話を聞くため磯部さんと一緒に車を走らせた。

鮮冷は、鮮魚の冷蔵冷凍事業に携わってきた石森商店と、加工技術に強みを持つ岡清が一緒になり、2013年にできた会社だ。岡清は、東日本大震災では本社や工場が全壊、流失するという甚大な被害を受け





株式会社鮮冷 新妻宏太

ている。震災から2年というスピード感で新会社を立ち上げた背景には何があるのだろう。「雇用の継続、そして雇用を増やし、地域経済に貢献したい。女川の水産業を守るという経営者の思いがあり、2社が一緒になり新会社を立ち上げた。加えて、岡清の繁忙期が春・夏、石森商店の繁忙期が秋・冬であり、繁忙期が異なることにより雇用を安定させる効果もあった」と新妻さん。

当時、岡清は養殖ホタテの卸がメインで春と冬が繁忙期、一方石森商店はサンマやイワシ、サバの大量加工に強みを持ち、初夏から秋にとれる魚を一気に加工するビジネスモデルだった。2社が一つになり、新たな設備投資が進み、新たなビジネス機会獲得に向けた動きが加速しているという。

1つは、急速冷凍でうまみを保ったまま冷凍できるトンネルフリーザーの導入だ。鮮度を保ったまま冷凍できるので、解凍してお刺身で食べられるという。この技術で女川のホタテやサンマ、ホヤを冷凍。国内のみならず海外のホテルや飲食店で好評を得ている。

もう1つは、トレーシーラーという窒素充填の包装機械を入れることで実現した魚の煮付け等総菜品の販売だ。「常温で1年持つので、いつでも気軽に魚が楽しめる。震災時、食べ物がなかったとき、当社の倉庫には冷凍や冷蔵品しかなかった。何かあったとき火を通さずそのまま食べられるものを提供したいと強い想いで生まれた商品」と新妻さんは力を込める。商品は大阪の百貨店でも販売する予定で、長年BtoBを軸にしてきた同社では新たな商流獲得の機会にもなっている。

「女川町のホタテは肉厚で甘みがあり、本当においしい。女川町の海鮮の魅力を広め、女川に遊びに行ってみようと思える人を増やし、地元貢献していきたい」と新妻さんは締めくくった。

## 20代だからこそできた決断 ホテル・エルファロのリニューアル

「次は宿泊業で町を盛り上げようと頑張る人の話を聞いてほしい。復興に向けた作業員の宿泊先不足解消に取り組み、観光拠点としての役割も担っている」と磯部さんが紹介してくれたのは、ホテル・エルファロの田中雄一朗さんだ。

女川駅の裏にトレーラーハウスが建ち並ぶ。ここがホテル・エルファロだ。東日本大震災をきっかけに誕生したホテル・エルファロは国内最大の国産トレーラーハウスホテルとして日本記録に認定された。車輪を付けたまま、旅館業法や消防法をクリアした宿泊施設は世界的にも珍しい。ここで社長を務めるのが、田中さんだ。

「東日本大震災では宿泊業者も被災。民宿が全て流されてしまうなか、スピーディーに宿泊事業を再開し、復興を進めていきたいという思いがトレーラーハウスを選んだ理由」と切り出した。

トレーラーハウスの宿泊施設が立ち上がったのは、2012年12月。現在は駅裏に立地するが、当初は山側の清水地区にあり、被災した宿泊事業者4社が協同組合を構成し立ち上げた。

「清水地区でのトレーラーハウスホテルはいわば復興に向けた緊急措置的に許可されたもの。2016年には、立地する清水地区でかさ上げ工事が予定されており、同じ場所で続けることが難しくなった」

そこで、新たに法人を立ち上げ、ホテルを駅裏に移転させリニューアルオープンすることが決まった。

事業を継続しつつ移転するか、移転せずに事業を終了するのか、新たに法人を立ち上げるにしても誰が経営者をやるのか——そこで手を挙げたのが、清水地



ホテル・エルファロ 田中雄一朗



ホテル・エルファロ



区時代に支配人をやっていた田中さんだ。聞くと、田中さんは東松島市出身。ホテル勤務の経験はあるが経営となると未経験だった。

「当時は30歳手前。周りはこの若者ができるのかと思っていたでしょうし、知り合いからは、借金をしてまでお前が引き受ける必要があるのかと、めちゃくちゃ反対された」と田中さんは振り返る。そんな周囲の反応とは裏腹に、「まだ若いし失敗してもどうにかなるだろう」と思っていたという。町の人が支えてくれる雰囲気も感じていた。

融資の取り付けや許認可などに奔走し、工事の遅延やコスト増にも悩まされるなか、2017年8月ホテル・エルファロはリニューアルオープンを果たす。

駅裏に立地するホテル・エルファロ。目の前には商

店街が広がり、観光拠点としての役割も担うのではないかと。田中さんに話を振ると「女川町の観光拠点になんて大それたことは考えていない。ホテルに宿泊いただくお客様へ、お店を案内したりすることで結果的に町に貢献できればうれしい」と控えめに話してくれた。

トレーラーハウスの特性を生かしバイクツーリング客を呼び込んだり、サイクリングイベントを企画したり、様々な取り組みを進める田中さん。ホテルのPRが女川町を訪れる人を増やすことに繋がっていくのだろう。

## 人との出会いが生んだ レストランリぼん

ホテル・エルファロを後にし、駅前に広がる商店街シーバルピア女川にある、洋食レストランリぼんの店主山田隆大さんを訪ねた。

磯部さんによると料理の専門学校を卒業後、仙台で就職した後、地元女川に戻りレストランを開業したのが山田さんだという。

開業のきっかけは何だったのだろう。「うーん、料理で町を元気に、とかじゃないんですけど僕で大丈夫ですか」と山田さん。詳しく聞くと、調理専門学校を卒業するタイミングで震災が発生。一旦は仙台で就職するも、復興に向けて進む女川町で飲食店を手伝ってほしいという話があったという。「当時は自分でやるなん



洋食レストランりぼん 山田隆大

て考えてない。声をかけてくれた人の下でやるつもりだった」。ところが一緒にやるはずだった人は難しくなり、結果的に山田さんがやることになったという。

最初は、仮設住宅が立ち並ぶエリアのお弁当屋さんだった。そこからシーパルピア女川に店舗を構えてオープンしたのが2016年だ。「実は当時はお店を持つなんて考えてなかった」とこれまた意外な答えが。お店をやるつもりはなかった山田さんだが、テナントに急なキャンセルがあり、引き受けることになったという。地元の魚介類を使ったパスタなどを提供。そこから10年、より地元と向き合い、地元食材を生かした料理を作りたいと、狩猟免許を取得し、鹿肉を使ったハンバーグやパスタもメニューに加えていった。鹿肉を加工したペットフードも販売している。

「成り行きに任せるなかで、女川の魅力に触れ地元がより好きになっている。食の魅力もさることながら、発想力と行動力のある人が多く、引っ張ってもらって

る」と話す山田さんだが、成り行きとはいえ店を構える思いっきりの良さは十分な行動力だと感じる。人との出会いで生まれた洋食レストランりぼん。今後の進化が楽しみだ。

### 『希望の種』をこの地で芽吹かせる アスヘノキボウ

ここまで女川町の様々な人に会い、話を聞いてきたが、磯部さん、田中さんは移住組と女川町以外の地域から来て町づくりに関わっている人が多い。次に話を聞くのも移住者。宮崎県から移住し、アスヘノキボウという団体で地域活性化に取り組む岩部莉奈さんだ。

2017年に大学のインターンシップで初めて女川町を訪れた岩部さん。「移住を決めた理由は、人の魅力。女川の皆さんは新しいアイデアも柔軟に受け入れてくれ、カッコいい大人がたくさんいる。この環境で成長していきたいと思った」と話してくれた。

アスヘノキボウは、「『希望の種』をこの地で芽吹かせる」をミッションに希望をもって新たに挑戦する人を増やすことに取り組む。

「アスヘノキボウは2013年に設立。当初のミッションは『女川町の社会課題解決を通じて、日本、世界の社会課題解決に貢献する』というミッションだった。そこから15年経ち、女川町の社会課題解決を通じて他地域も良くしていきたいという思いは引き継ぎつつ、どのようにやっていくのかに視点を置いて新しいミッションをつくった」と岩部さん。



アスヘノキボウ 岩部莉奈

特徴的な取り組みの1つは「お試し移住」。特徴は、女川町への移住意志に関わらず暮らしを体験できること。「お試し移住は移住者を増やすためではなく、女川町に関係する人を増やすことが目的。卒論の研究で来る学生さんや旅行の延長線で女川町内のお店でアルバイトする人など様々」。ライトな層も多数受け入れ、移住者を増やすことが目的ではないが、お試し移住を通じて27人が移住している。

2つ目は、創業支援プログラム。こちらも女川町での起業を前提とするものではなく、地方で起業するきっかけづくりや起業家同士のネットワークづくりに役立ててもらうものだ。

加えて、文化継承にも力を入れており、2025年度は、女川の復興を描いた絵本を制作。甚大な被害を

受けた中でも前向きに取り組む大人たちを見せ、町への誇りを醸成する。

「次世代層がどんどん挑戦していく土壌をつくり、女川町を挑戦の舞台として知られるように力を注いでいきたい」と岩部さんは話してくれた。

## 子供たちの居場所づくり まちとこ

最後に次世代を担う子供たちへの取り組みを聞くため、「まちとこ」の代表、芳岡孝将さんを訪ねた。北海道出身の芳岡さんは、震災当時、教育NPOカタリバの職員として女川に赴任。震災から3年後、カタリバは事業譲渡を検討するが、引継ぎ先が現れず、芳岡さんが手を挙げ「まちとこ」を設立した。カタリバから女川町の教育支援事業「女川向学館」を引き継ぎ、地域の学校や教育委員会と連携しながら、子供たちの教育サポートを行っている。「震災後の人口減少でマンパワーが減り、学校や教育委員会とは別に民間で子供たちに関する課題を解決する場が必要と感じていた」と芳岡さん。

女川に移住し、組織を立ち上げる、この原動力は何だったのだろう。「教え子たちですね。カタリバで教えた子供たちが帰ってこれる場を残しておきたかった。震災当時の子たちは、地元の思い出の場所がないんで





すよ」。どういう意味だろう。「震災当時子供だった子  
たちも就職で遠方に出ていく年齢。彼らは仮設住宅で  
育っているので、新しいおうちに部屋はあるけど思い  
入れはあまりない。学校も新しくなり、先生も転勤して  
いる。帰ってきたときに昔のままで集まれる場所ってあ  
まりない。地元になんな場所をつくってあげたかった」

取材中、どんどん生徒さんが集まってくる。18時か  
らは塾が始まるという。「塾といっても、基本的には子  
供たちの自律的な学びをサポートする。わからないと  
ころを教えたり、テストの振り返りをして次の目標設定  
をしたり。スタッフは先生というより、年上のお姉さん、  
お兄さんですね」

最後に今後の展望を聞いた。「まず卒業生の働く場  
所をつくっていきたい。働き場所がないわけではない



が、限られているのが現状。大学で学んだことを生か  
したいなど多様なニーズに応えられる働き場所をつく  
りたい。そして、今いる子供たちに対しては、学校以外  
の色々な居場所をつくってあげたい。子供たちの数が  
減るなか、1学年1クラスだと、そこに馴染めない子も  
出てくる。学校以外の居場所をつくり、そこでの経験  
を将来に繋げられるようにしていきたい」



今回、6人に話を聞き、みんなが口にしたのが「女  
川町の魅力は人」という言葉。町に関わる人がピース  
になり、女川町の復興が進んできたという磯部さんの  
言葉通り、人の力がこれからの女川を作っていくのだ  
ろう。また、女川町に行きたくなった。



まちとこ 芳岡孝将